

医事・文談 九百六十七 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その255

子規周辺の人びと(五)

子規の青年期の体格については、6表にわたる活力統計表をのこして、決して貧弱な体格ではなかった。身長においても、体重においても先ず普通の数値を示しているし、後年、彼を悩ました肺についても十分な活量を有していた(本稿七百七十六及び七百七十七)。

高等中学在学中は、野球に熱中し、捕手をつとめたほどだから運動神経にも長けていたようだ。

「松羅玉液」中に、戸外遊戯として各種の遊戯について述べているが、ベースボールとして長文の記述があり、訳語については現に用いられているものもあり、試合の運行・ルールについてもよく核心をついた説明がなされていて、さすが野球殿堂入りをした人物と思わせるのである。

久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも

今やかの三つのベースに人満ちてそぞろに胸のうちさわぐかな

こんな歌まで作っているくらいスポーツ好きの子規も、幼少の頃は背が低く、丸顔で鼻も低く、へぼでへぼで、弱味嗜で、近所の子供とも喧嘩するようなこともなかった。組の子供にいじめられてと、逃げて戻るので、妹の律が石を投げたりして仕返しをするほどへぼだったという。

言葉覚えるのもおそかったようで、そのうえ手もよっぽど鈍で紙鷲もあげられず、独楽もまわされなかった。縄跳び、鬼ごっこもしなかった。

松山で初めてお能があったとき、能の鼓や大鼓の音におじて、とうとう家に帰ってきてしまつて、大原の祖父に、武士の家に生まれて、お能の拍子くらにおじるとはとひどく叱られた由。

祖父で漢学の師である大原観山は、「升はなんぼたんぞ教へてやつても覚えるけれ、教へてやるのが楽しみぢや」と云い云いた。

その反面「余幼より懶惰、学を修めず、八九歳

の頃観山翁余を誡めて『余の幼なる時も汝程は遊ばざりし』といはれし時には多少の感觸を起したり。翁は一藩の儒宗にして人の尊敬する所たり。余常に之を見聞する故に、後來学者となりて翁の右に出でんと思へり。然るに今翁の話聞き、翁の少小より学問につとめられたりと知りし時には一種の感觸を發したり。何ぞや、曰く『余は翁に凌駕せんと思へり。然るに翁にしてかく勉強されたりといへば、余は到底翁の右にいづるはおろか、翁の片腕にも足らぬものとなるべし。如何にしたらばよけん、勉強はきらひなれば』と、斯く思ひつ今日もくれ、あしたもくれ、東京へ来ても同じこと、少し勉強したことは詩作許り。尤勉強せぬは学課なり。されど余の心中に常に翁の訓誡を忘れたることなく、勉強せざるべからずとは絶えず思へり。』(筆まかせ 明治22年)

こうしてみると、子規は幼時は弱虫で、人と争うようなことは好まず、喧嘩になりそうになると逃げ帰ってきたらしい、子供の遊びの紙鷲上げ、独楽まわしも出来なかつたらしい。

鼓や大鼓の音にもおじける気弱な子だった。しかし外祖父大原観山は、幼い子規の頭腦を早くも観破して、物覚えのいいのを羨しみに教えた。

ところが、子規の遊びが過ぎるのを厳にいましめたのは、正当な学問に導くための訓誡だったのである。

子規の遊び過ぎと言っても、子規は通常の子どものような遊技を好まず、また不得手であったようだ。観山翁は、子規の7歳から9歳までの一年数カ月業を授けたに過ぎない。

早朝五時頃、再従兄弟の三並良(母八重のいとこ)と観山の私塾へ漢籍の素統を学びに通つたのであるが、母が菓子や密柑などを手に持たせて起こした。そうしないと起きないのであった。

当時は素統が、学問の第一歩であったのであるが、それ以外にどんなことが教えられたのであろうか。それに子ども仲間の遊びもあまり得手でなかつた子規を誡めるのに「遊び過ぎ」とはどういう方面から言えたのであろう。しかし後年まで忘れずにいたのだから、肝に銘じたのである。

お知らせ

北海道医報ファイルの送付について

北海道医師会広報部では、北海道医報を整理・保存するためのファイルを作成しております。ご希望の向きは下記までご連絡下さい。無償にてお送りいたします。

記

申込先：北海道医師会事業第二課

〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目  
TEL(011)231-1725 FAX(011)252-3233